楽しい暮らしのシニアマガジン

1992年4月1日(毎月1回1日)発行　通巻第12号　1991年8月20日第三種郵便物認可

ON THE WAY

月刊[オン・ザ・ウェイ]

4

[特集]定年の愉しみ

[ふるさと風紀行]からつ漢韓、玄界灘へ——唐津

[これからがお楽しみ]多湖輝

「ガラクタが語る歴史や文化を子どもたちに伝えたい。それが恩返しです」

校長から私設資料館長になった

相川千代治さん

千葉県君津市の山中に相川資料館はある。二階建の延べ四〇坪に納められた「資料」ははたして何千点になるのかわからないほど。

行灯、センベイ焼きの道具、片口、おもちゃ、週刊誌の創刊号、教科書、軍票、湯タンポ、ぜんまい式蓄音機、日光写真、脱穀機、石臼、節句のお祝い道具、鯉のぼり……。

昔はどのうちにもあったり、見かけたりしていたのに今はもうない生活道具やおもちゃの数かずは、すべて「穴のない五銭玉」からはじまった相川さんのコレクションだ。

――いつから資料館を？

「中学校長を最後に教職をやめた時ですから昭和五十九年ですね。うーん、それからもう八、九年になりますかね」

――それまで何十年と集めてこられたわけですか？

「自分が使っていたものや、骨董屋で見つけたもの、私がヘンなものを集めていると聞きつけて持ってきてくれたものや、なんやかやで収拾がつかなくなったもんで、自分の家の庭に退職金でこんなものを建てたんですよ」

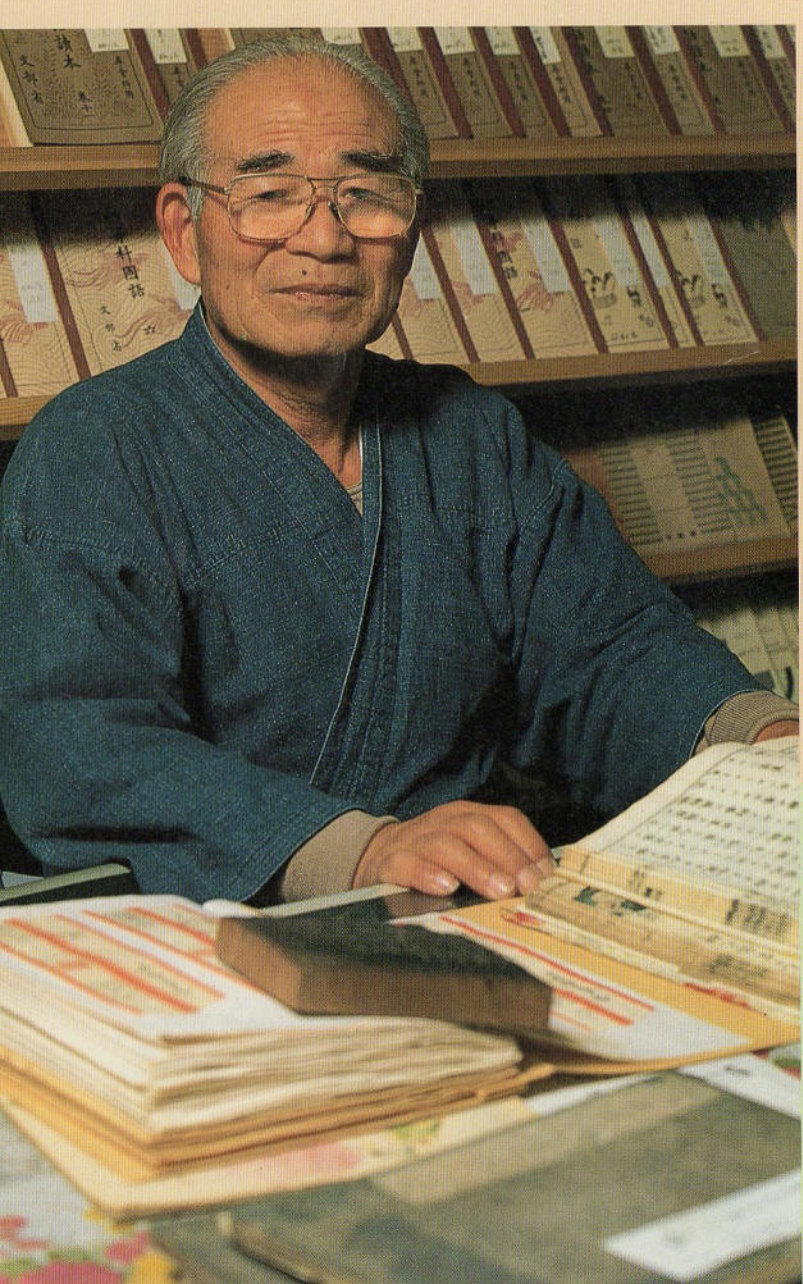
――テーマといったものは？

「そんなものは別にないんです。生活というのはテーマで絞れるもんじゃないですから。文化というのは生きざまで、生きざまの表現こそ文化だと考えれば、狭いテーマに絞ることはないんじゃないですか。できればそういう生活文化を時代ごとにたどって、体系化してみたいとは思いますがね」

アイロン、蓑笠、おわん、杵、下駄、化粧道具、荷馬車……。

入場、見学は無料だ。

「無料だからいいんですよ。きれいな言葉で『趣味と実益』なんて言うのはダメです。たんまり退職金や年金もらって外国旅行するより、小さくても奉仕をするのが大事。奉仕によって自分が磨かれるというのが、私のモットーなんですよ」



明治以来の教科書を背に「趣味っちゅうもんは他人から与えられるもんじゃないですよ」とおっしゃる相川さんは68歳。

これはマッチのラベルのスクラップ。時代の文化が小さな四角につまっています。

こういう生活道具もずらーっといっぱい。